

奈良文化女子短期大学 幼小接続ワーキンググループ合同研究会
第52回 議事録

- 1 日 時 平成25年11月16日(土) 11:00~12:45
2 場 所 奈良文化女子短期大学 本館 5階(504教室)
3 参加者 9名(含学生2名)
うち本学事務局 2名

4 内容

(1) 善野代表によるミニ講演

本日のワーキングに先駆け、報告内容にアプローチするための方法とツールを紹介。園内研・校内研でも活用されたい。参観日に保護者に配付して、参観後の交流にも活用できる。本日の実践報告もこれらの視点を持ち、後半の交流会を深めていく。

以下の「いつも持っていたい3枚のカード」を紹介

(※青・緑・赤の付箋紙(7.5×7.5)を参加者に配付。)

「いつも持っていたい3枚のカード」

- ①「賞賛」すごいねカード→(青)
事実に基づく褒め、2時点の比較
社会的承認、自信や新たな意欲の喚起
- ②「質問」聞きたいなカード→(緑)
伝わっていないか、伝わりにくい情報が判明
相手意識や目的意識の明確化
- ③「アドバイス」こうしてみたらカード→(赤)
改善の方向性への客観性と具体性をもった提言

(2) 岐阜県関市立下有知小学校の幼小連携 ～1年生国語の授業から～

<報告者>岐阜県関市立下有知小学校 教頭 大山夏生先生

<概要>

- ・パワーポイントによる実践報告。
 - 1年生国語授業公開。3年目の教員による指導。
 - 幼稚園・保育園の園長先生・年長担当の参観者を招待。
- ・単元名「こんないしをみつけたよ」
- ・単元の目標
 - ◎必要な事柄を思い出したり見て確かめたりし、情報を集めて言葉で書くことができる。
 - ◎姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して順序立てて話すことができる。
 - ◎友達の話に興味をもって最後まで聞くことができる。
- ・教材について 石という題材で、「自分の石」の特徴を友達に分かりやすく伝えるために書くことを指導する。特徴には、形、大きさ、色、模様、手触りなどの形態的特徴がある。それらの特徴を使って、「自分の石」を友達(隣のクラスの子どもたち)に分かってもらえるように文を書く。児童にとって、「物を説明する」学習の第一歩である。児童には、夏休みの間に「自分だけの石」を見つけてくるよう話しておいた。色や形などの特徴を手がかりに、石に合った名前をつけ、自分の石の特徴を説明して友達に見つけてもらうという、児童の好きなゲームを単元の出口に設定することで、意欲的に取り組むことができるようにしたい。そのために、まずは教科書の石の写真を活用し、特徴を見つけたり、石に合った名前をつけたりする。次に自分が見つけた石を使

って特徴を見つけて書くという手順をとりたい。①石の特徴に合った名前をつける、②友達に自分の石を見つけてもらう、という二つの目的意識をもって書くことに取り組ませる。この際、出口で行うゲームで、友達に自分の石を速く見つけてもらうことができるように石の特徴がよく伝わる言葉を選択して書くことができるようにしたい。

・単元指導計画は全4時間 「関心・意欲・態度」「書く」「話す・聞く」「言葉」

第1時 教科書の写真を見て、石の特徴を見つける(第4時のクイズを予告)

第2時 自分の石の特徴を見つけ、ワークシートに書く(夏休みに石を採取)

第3時 石の特徴を友達にわかりやすく伝えるために、文を書く。(本時)

(台紙に短冊を繋いで「文章=クイズ」を構成。)

第4時 石の名前と理由を友達に分かりやすく、大きな声で話す。

友達の発表を最後まで聞くことができる。(隣のクラスの生徒に「文章=クイズ」から自分の石を当ててもらおう)

・実践報告の主張点

① 相手意識 単元の出口に「石あてクイズ」(子どもたちはクイズが大好き)

② ワークシート 視点の明示(形・色・模様・大きさ等の観点を持たせる)

③ 短冊の活用

書く意欲づけ(書く力の差が出始め、長文は難しいので短冊を繋いで文章を構成する)短く丁寧に書く(マス目を使って書写指導も狙う)(低次の児童への支援)

・石の状態についての表現を振り返る(「キラキラ」「つぶつぶ」等)

・先生よりモデル提示を行い、先生からのクイズに答える。

・短冊を色分けすることにより子供たちはやる気を起こすと同時に、先生はこどもの状況を短冊の色によって把握することができる。

・指導の上で、表記上の誤りを見つけ確認する。

・終末は、よい例示を行い、手本とする子のクイズを聞き、正解へ至る。

・次時の予告を行い、意欲を盛り上げて終了。

◆幼小連携の視点から(園長先生、年長の先生からの感想)

・全体の集中力のすばらしさを賞賛(入学後6カ月での変容に感動に涙ぐむ)

・文字を丁寧に書く指導の徹底(黒板や廊下の掲示の文字)

・視点を増やし、語彙を増やす指導が必要だと実感した

・書くことに意欲的な姿の実態を観察できた

⇒小学校での6カ月の教育を園の先生方から評価され、認められた。

→1年生の担任に直接聞いてもらいたい。(研究授業のまとめとは別)

→小学校教員の指導のあり方についての自信につながる。

<報告者まとめ>

◆幼小連携を進めて行く上で、それぞれに教育目標があるが、それらを繋いでいく時間と場をいかに作っていくかが大切である。隙間の時間をぬって繋いで行き場を設定することが報告者の役割であり課題と考えている。

(3) グループによる話し合い：本日の善野代表のミニ講演にあった「3枚のカード」の手法を用いて、実践報告についての話し合いが進められた。

(記入後、模造紙に貼って意見交換・協議。*参加者からの質問・賞賛・アドバイスに報告者が応答し、代表が助言)

◆「質問カード」

・よい例示とあるが、(幼稚園の場合)発表したい子となると複数の子どもが手を挙げて交通整理をして進めて行くのだが、小学校では僅か半年程度で整然と学習している。

その点はいかが。→よい例示については予めリストアップしている。なるべく子どもたちが時間内で発言できるように配慮。

意欲と学びの目的が徐々に切り替わっていきながらも、黙って挙手できることがいつごろからできるのか。

・「ハイハイ」と繰り返し、挙手しても指命されない場合は指命の前に答えを言ってしまう。→入学当初から、子どもには「一度だけハイと行って、てをあげよう。黙って手を挙げている子を先生はちゃんと見て、こんなによく聞いて考えていると分かってみているからね。」と伝えている。子どもへの丁寧な言葉がけと挙手の意味と何故そうなのかと言う説明が大切。形ではなく意味を伝えることが指導者の役割である。

・幼稚園の実習時に気付いたが、園児には個人差が大きくある。文字を書けない子どももいる中でどのように指導されたのか。→経験年数の多いベテラン教員が、若手教員である1年生担任に対して技術を伝授し指導もしている。学習集団を作る事で、皆で勉強に向かって行けるようにしている。集団の中で、一人を引き上げていくようにしている。現在37人学級だが、特別支援アシスタントと言う制度(免許を持っている先生が日中5時間兼務可能)があり、複数配置で対応している場合もある。

児童に対して、思い付きではなく、根拠を持って言うように指導している。言葉以外に具体物や掲示物を示しながら相手に分かるように伝える指導を行っている。

相手意識を高め、論理的に話せるようになっていく過程では、「その訳は」というキーワードがある。根拠を本に話させるように徐々に指導していく「話形」をベースに指導しながらも、形にだけはめ込まずに、より伝わりやすく上手に話している友だちから学ぶ対話が重要。学びの集団をより意識した接続期の指導が重要だと考える。

・幼稚園や保育園での公開保育に小学校側からも参加しているのか。案内はもらっても行きにくい→小学校側からの発信一方であり、特に保育参観に行ったことはない。

幼稚園や保育園も含めて次世代の先生を育てるについて、ジェネレーションギャップが生じざるを得ないような年齢構成の分布になってしまった。特に小学校現場では低学年の指導力について危惧される。故に小学校の先生が幼児教育の現場を知る機会を充分とる事が大切。園の先生のパフォーマンス力や場の盛り上げ方、子どもへの対応から学ぶところ大。本時の指導者も身振り手振りのダイナミックな効果は、園の先生との交流(幼小連携活動)から学んだ。

・教員だけが訪問し合うことは時間的に困難である。園は小学校に対していつでも門戸を開いてくれているが、小学校の担任は自習にして行かなければならない。そのような体制は持っているのか。年に何回程度設定しているのか。→7月の七夕交流会、芋ほり大会、小学生への質問会、1日体験入学を実施。運動会は校長先生が行くのみ。

小学校の教員は、子どもを残して、園内研修の公開保育を参観に訪問する時間は作りにくい。しかし、子どもと共に交流の場面で学んだり、実態を知ったりすることで幼児期の関わり方を学ぶことは可能。

運動会は「知・徳・体」の成果と課題の凝集である。視点を持って見る事が大切。休日の行事になることが多いので、招待される管理職だけでなく、むしろ教員がリアルタイムで明確な視点をもって参観してほしいが、録画による校内研修なども可能。

◆「賞賛カード」

- ・短冊の利用による子どもたちに対する先生の配慮。
- ・書くことを通して語彙力が増していく。
- ・公開授業だけでなく、公開保育の実施も大切。
- ・一人の良い見本は、他の子どもたちの自信に繋がる。
- ・意欲が高まるような言葉がけ。

- ・書き方のアドバイスも同時に行っていた。
 - ・限られた4時間の国語の中に色々な狙いが組み込まれている。
- ワークシートには自分の石がいろんな観点で表される。単に国語だけでなく、比較・科学的見方などの理科的または、生活科の視点と色々なものが合わさっている。自分の石という点から、子どもにとって愛着もあり、書き進めて行くことができる。クイズの設定を行っている。
- ・短冊は昔からあるが、2枚目の黄色の短冊カードで止まっている援助を要する子どもが何処で立ち止まっているかが判る工夫がある。児童数が多いほど、色短冊の識別は効果的で、学習者・指導者双方の立場からも段階を経て判りやすい。
 - ・子どもの実態を踏まえた出口。クイズ形式の予告が学習のゴールを示している。
 - ・国語という教科をベースにしながら、生活・理科・ものの見方・観察力等と広がっていく視点を幼児教育の先生方がもつと、子どもたちの気付きは、五歳児と六歳児では、大きく異なる働きかけをする事無く可能となる。
 - ・石は遊びの中にどのような環境でもみられ、シンプルな素材でありながら、視覚(色・形)、聴覚(音)、手ざわり(触覚)など純感覚を磨く応用ができる。

◆「アドバイスカード」

- ・園長先生や年長の先生方も研究協議に参加頂ければ直に聞いて頂けるのにと考える。
- ・ペアワークやグループワークを取り入れて、子ども同士の協働学習の場面を作ってはどうか。

(4) 善野代表よりまとめ

子ども同士が関わりあう場を設定し、一層言葉の力を育成することが可能になる。これは、限られた4次の学習計画の中でも充分可能と考える。

幼児教育の参観者からは、参観時のリアルタイムに評価カードなどを活用して、「育てたい力」に基づく評価を頂くことも良いのではないか。幼小接続も校内授業研究も学校園評価も一石三鳥のPDCAサイクルで、「この目標(Plan)に対応した授業実践(Do)をしています。ご覧になって如何ですか?」と言う評価(Check)である。「幼稚園や保育園の先生方にはこのように見えたのか、この点が評価されたのかと言う事実に基づいて、もっと子どもたちはこんな事もできます。子どもたち同士で、話し合うことも幼稚園で行っていた。」となれば、小学校の授業改善(Action)へと結びつく。また、就学前の幼児教育の見直しにもつながる。

授業者が直接外部からの評価を得て授業を改善していくについては、幼保小の学校評価にどのように組み込むかについて、これはカリキュラム評価である。

今回は、ここまで具体的な研究授業実践例をもとに幼保小連携の体制の報告を受けたことに感謝したい。熱心な協議で時間が来たので、今後は、このような実践も含めて、学校園の評価に位置付くカリキュラム改善についてもふれて行きたい。

(5)参加学生の感想

・三色のカードを使い、どんどん学びが広がっていき、自分では気づかなかった学びが広がっていきました。これが個人の学びでは得られない集団学習の良さだと実感しました。子どもたちも集団学習の中でみんなの力によって力をつけていくことが実感できました。こういう研究会に参加されるのが、園長先生だけでなく多くの保育者が参加しないともったいないと思いました。ありがとうございました。

5 次回の予定

平成25年12月21日(土) 11:00~12:30 (受付10:30~)